

近代文学研究叢書
第五十一卷

昭和 55 年 11 月 10 日 印刷
昭和 55 年 11 月 20 日 発行

[¥3600]

著者	昭和女子大学近代文学研究室
発行者	東京都世田谷区太子堂一丁目 坂本由五郎
印刷者	東京都千代田区神田錦町三丁目一四番地 梶原忠幸
発行所	東京都世田谷区太子堂一丁目 昭和女子大学近代文化研究所 振替口座 東京四一七〇八六七 電話 (422) 五一三一八番

近代文学研究叢書

第五十一卷

昭和女子大学

近代文学研究室

監

修

吉矢村本宮保人浜能成中内辻玉島山佐佐笹坂齋木木河金金片萩岡太上石石池秋

田野松間内見勢瀬林井田伯藤沢々本藤齋子子桐原田井森田田庭
坂徳藤村宮木由村侯井保
澄峰定久秀圓頼正謙幸瞳梅幹美一実武健願泉三磯延吉亀太

夫人孝雄雄都吉郎賢勝二濯鑑助二允友二明郎郎寛毅修英雄二智水生郎吉男貞鑑郎

(国(英(近(英(国(近(美(近(英(仏(英(国(比(英(文(国(独(国(英(仏(比(和(歴(国(英(和(俳(近(比(英(児(国(国(演
語)文)代)語)文)語)代)文)文)文)文)較)法)文)文)文)文)文)文)文)文)文)史)文)歌)文)代)較)文)童)文)文)劇
学)

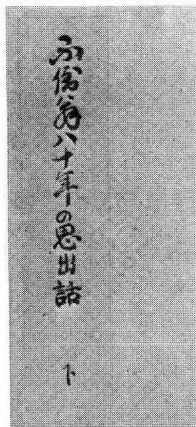
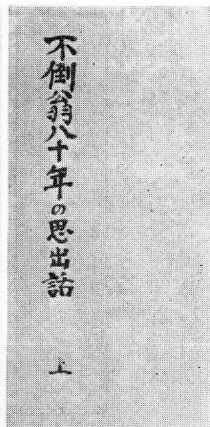
水谷不倒 (1)

肖像 (水谷千晴氏蔵)



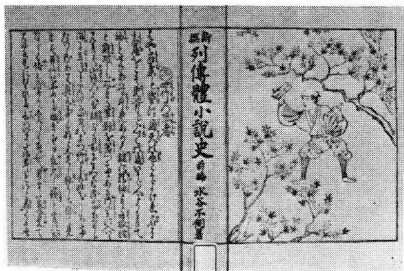
掛軸 (水谷武彦画・水谷不倒賛) (水谷千晴氏蔵)
筆跡・不倒翁八十年の思出話 (水谷千晴氏蔵)

筆跡・不倒翁八十年の思出話上下 (自筆本)
(水谷千晴氏蔵)



さびがたな・「新小説」明治29年7月刊
(昭和女子大学蔵)

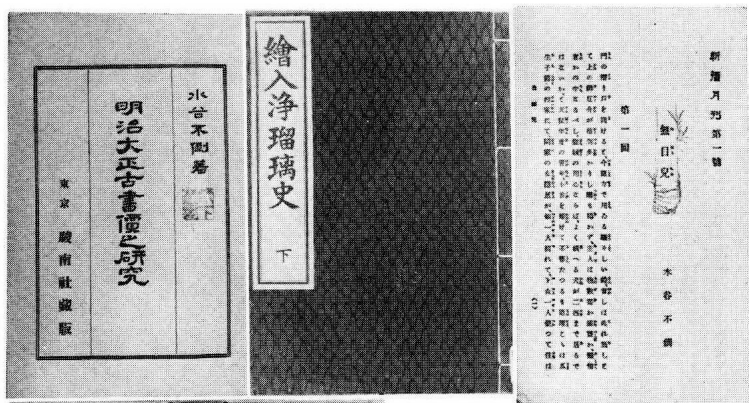
新列傳體小説史 前編
昭和4年7月刊
(昭和女子大学蔵)



水谷不倒 (2)

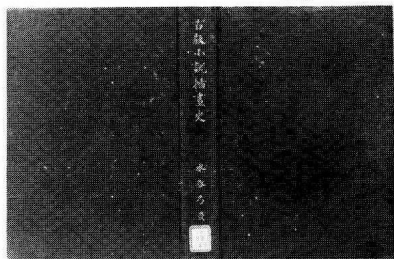
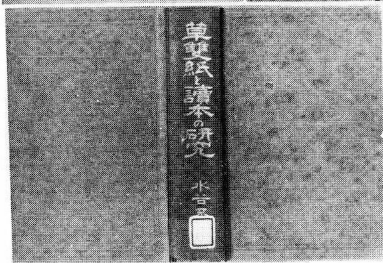
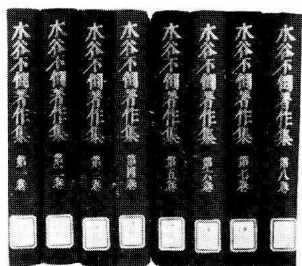
無目見・「新著月刊」明治30年4月刊

(昭和女子大学蔵)



水谷不倒著作集

第一巻〜第八巻 (昭和48年10月〜52年6月) (昭和女子大学蔵)

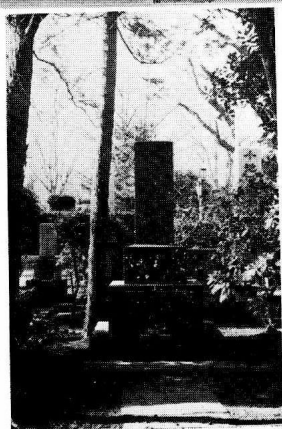


古版小説挿書史・昭和10年4月刊
(昭和女子大学蔵)

繪入浄瑠璃史 下・大正5年5月刊
明治大正古書價の研究・昭和8年1月刊
(昭和女子大学蔵)

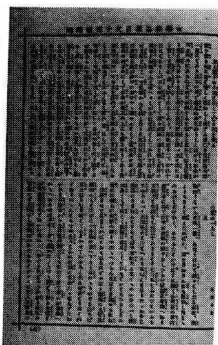
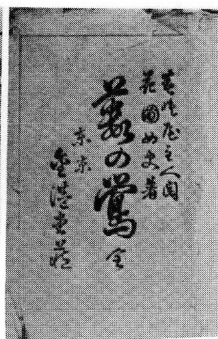
草雙紙と讀本の研究
昭和9年1月刊 (昭和女子大学蔵)

墓——雜司ヶ谷靈園



三宅花園 (1)

肖像 (三宅家蔵)



薈の鶯・初版本・明治21年6月刊

(三宅家蔵)

小説薈の一ふし・「女学雑誌」

明治23年1月刊 (昭和女子大学蔵)

薈の鶯草稿とその第一頁 (三宅家蔵)

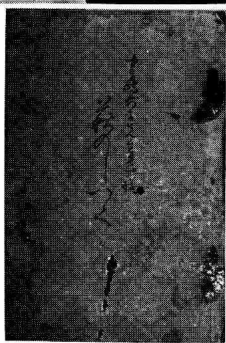
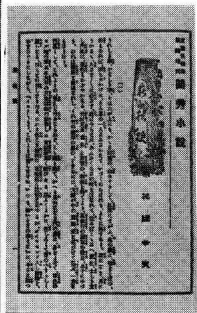
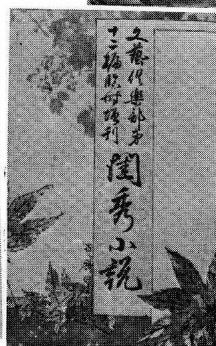


筆跡・(三宅家蔵)

書斎—渋谷区初台二—二七

萩桔梗・「文芸倶楽部」明治28年12月

萩桔梗本文第一頁 (昭和女子大学蔵)



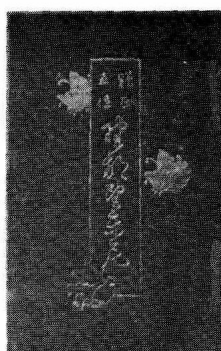
中島歌子先生遺稿「萩のしづく」

明治41年5月刊 (昭和女子大学蔵)

三宅花園 (2)

小説みだれ咲・明治25年3月刊

(三宅家蔵)



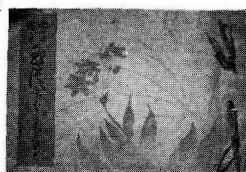
花の趣味・明治42年4月刊

(昭和女子大学蔵)

野村望東尼・明治44年4月刊 (三宅家蔵)

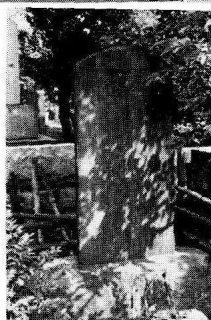
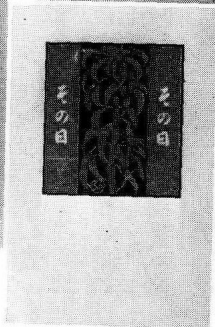
三十六家撰とその内容の一部

(三宅家蔵)



その日その日・大正3年1月刊
女性日本人・大正9年10月刊

(昭和女子大学蔵)



墓—青山墓地

女子玉すさ・大正5年5月刊

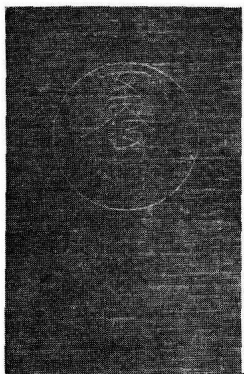
(三宅家蔵)

田口 掬 汀 (1)

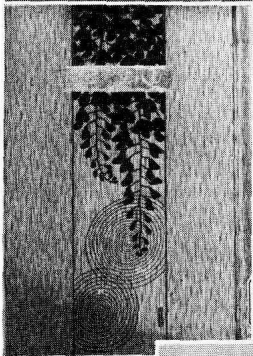
肖像



新生涯・明治38年1月刊 (昭和女子大学蔵)



片男波・明治34年7月刊
女夫波・明治37年7月刊
(昭和女子大学蔵)



伯爵夫人・明治38年10月刊
心の波・明治39年5月刊
(昭和女子大学蔵)

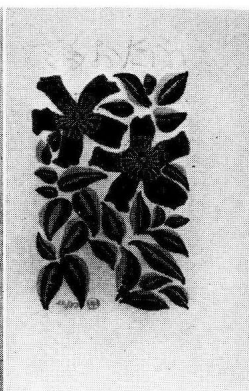
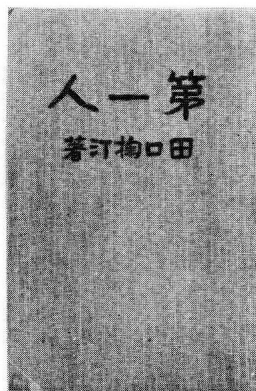
黒風・明治39年12月刊 (昭和女子大学蔵)



怪光・明治41年6月刊 (昭和女子大学蔵)

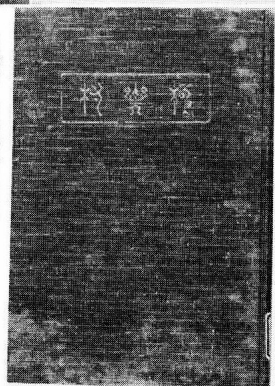
田口掬汀(2)

ふたおもて・大正5年1月刊
第 一 人・明治44年10月刊 (昭和女子大学蔵)

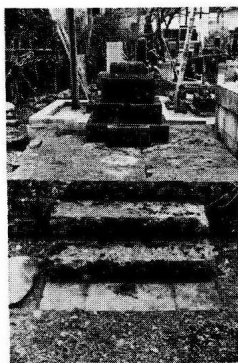


中央美術・大正5年10月創刊号 (国立国会図書館蔵)

極楽村・明治38年6月刊
(昭和女子大学蔵)



墓——秋田県仙北郡角館町
西覚寺



家の柱・明治44年6月刊 (昭和女子大学蔵)
北の國・明治45年7月刊 (昭和女子大学蔵)

島崎藤村 (1)

肖像

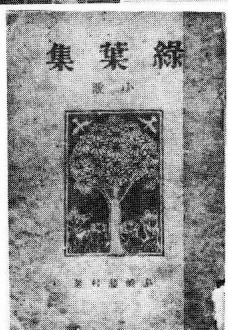


筆跡「夜明け前」校正刷
(昭和女子大学蔵)



夏草・明治31年12月刊 (昭和女子大学蔵)

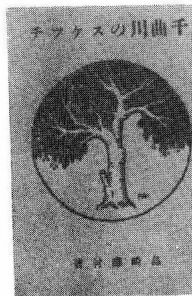
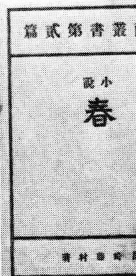
若菜集・明治30年8月刊 (昭和女子大学蔵)



一葉集・明治31年6月刊
緑葉集・明治40年1月刊

(昭和女子大学蔵)

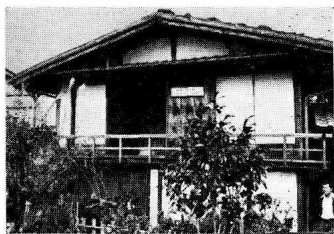
家上巻・明治44年11月刊 (昭和女子大学蔵)
春・明治41年10月刊 (昭和女子大学蔵)



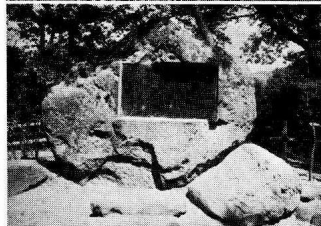
新片町より
千曲川のスケッチ・明治42年9月刊
(昭和女子大学蔵)

島崎藤村 (2)

藤村記念堂隠居所 (馬籠)



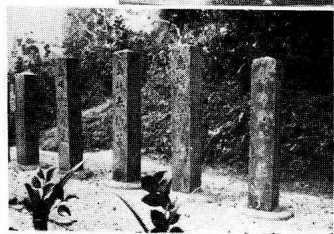
藤村詩碑 (小諸懷古園)



大磯町東小磯の終焉の家



永昌寺藤村家の墓 (馬籠)



里巴の和平



著 藤村 島崎

編輯 第四集 藤村

集最小
微風

著 藤村 島崎



餅力

著 藤村 島崎

第一集 著 藤村 島崎

エゼンラトエ

著 藤村 島崎



著 藤村 島崎

説小
新生



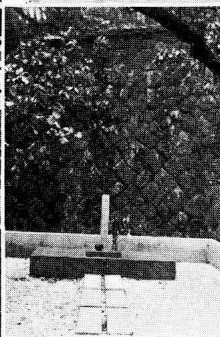
著 藤村 島崎

微風・大正2年4月刊
平和の巴里・大正4年1月刊
(昭和女子大学蔵)

エトランゼエ・大正11年9月刊
力餅・昭和15年11月刊
(昭和女子大学蔵)

新生第一巻・大正8年1月刊
(昭和女子大学蔵)

地福寺の墓 (大磯)



目次

口 繪	近代文学研究室……………(二)
第五十一卷の成立	近代文学研究叢書編集室……………(二七)
凡 例	近代文学研究室……………(二九)
水 谷 不 倒	近代文学研究室……………(三〇)
三 宅 花 圃	近代文学研究室……………(三一)
田 口 掬 汀	近代文学研究室……………(三二)
島 崎 藤 村	近代文学研究室……………(三七)
文 芸 年 表	近代文学研究室……………(三八)
PERSONALITY PROFILES	近代文学研究室……………(四三)
卷 末 付 記	近代文学研究叢書編集室……………(四三)
第五十卷年表補遺	近代文学研究室……………(四四)
索 引	近代文学研究叢書編集室……………(四五)

第五十一巻の成立

本巻は昭和期第二十六巻として、昭和十八年六月から昭和十八年八月までに歿した左記四名の研究調査を収めた。

水谷不倒は国学者、小説家。本名弓彦。安政五年（一八五八）十一月十五日、尾州名古屋の長者町三丁目に、父水谷與右衛門、母収の六男として生まれた。水谷家は代々尾州家御用達を勤め、人足問屋と江戸役返飛脚所を営んでいた。七歳の時、寺小屋東方塾へ入る。父が貸本屋から借りた『神編藻塩草』が機縁となり、草双紙を好むようになり、進んで草双紙や絵入本を読むようになる。家庭の事情で学校に上からず農業の手伝いをするかたわら古本屋「大惣」から本を借りて勉強した。明治十二年、徴兵検査を受けて入営、この機に教導団歩兵科に入隊した。まる七年間の軍隊生活を了えたのち、二十一年九月、東京専門学校（早稲田大学の前身）に入学。二十六年、文学科第一回卒業生として学窓を巣立つ。在学中は坪内逍遙を中心に近松研究に打ち込み、回覧雑誌「葛の葉」に近松研究を發表。「早稲田文学」には金子馬治とともに社員として関係し、「十返舎一九」他続々近世作家の研究を發表した。二十九年一月の「風流紙屑買」や「さびがたな」などにより小説家としての方向を決定、その後大阪毎日新聞社に入社して文芸部副部長として編集担任の傍ら江戸文学研究の基礎を作

る。退職後は専ら著述生活に入り、出版事業にたずさわる。彼は小説家としてよりは江戸文学研究家として顕著な業績をのこし、『假名字子』(大8)、『西鶴本』(大9)、『金平本全集解題』(昭元)、『新撰列傳体小説』(昭4)、『明治大正古書價之研究』(昭7)、『草双紙と読本の研究』(昭9)、『古版小説挿畫史』(昭10)、『新修繪淨瑠璃史』(昭11)等を代表的著作とする。昭和十八年(一九四三)六月二十一日、自宅で老衰のため死去、享年八十七であった。

三宅花圃は歌人、小説家、隨筆家。本名田邊龍子。号は、花圃の他ひさご、夢借舎丁々子。明治元年(一八六八)十月二十三日、東京本所田邊太一、母己巳子の長女として生まれた。父は蓮舟と号した儒学者で幕府の要職を歴任したが、徳川の瓦解により時流へのすね者の心境が遊蕩へ向わせ身代を傾ける。花圃の少女期はこうした外面派手で内面は火の車といった環境の中で、姫様として育った。幼少の頃から一九、春水、三馬、西鶴等を自由に読み漁り、和歌は伊東祐命、後中島歌子に師事した外、書道、琴、三味線等の遊芸の稽古事も修めた。学校は跡見女学校をはじめ桜井女学校、明治女学校と転々し、最後にお茶の水女学校に落着き、所謂欧化主義の全盛期に新しい教育を受け、作家としての素地が形成された。明治二十一年六月、金港堂より小説『藪の鶯』を処女出版、坪内逍遙、巖本善治の序を得て、世評もよく明治期の女流文壇では草分けの仕事となった。且つ、樋口一葉、木村曙ら女流の文学熱を大いに刺激した。その後「女学雑誌」、「文学界」、「文芸倶楽部」他に作品を発表、和歌も三宅雪嶺と結婚後は「花蔭會」を運営、弟子を養成した。しかし作家としての活

躍期は長くはなく、健康上の理由もあって明治三十九年頃には文壇とも疎遠になっている。大正九年、雪嶺創刊の「女性日本人」に歌壇を担当、評論も連載の筆をとり、「我観」にも同様にして夫に協力した。晩年には一葉の回想等数篇の随筆がある。著作には『みだれ咲』（明25）、『もとのしづく』（明34）、『花の趣味』（明42）、『その日その日』（大3）がある。昭和十八年（一九四三）七月十八日、宿痼腎臓病と老衰のため七十五歳で死去した。

田口掬汀は小説家。本名鏡次郎。号は掬汀の他掬汀漁郎、黒眼子、東花庵等。明治八年（一八七五）一月十八日、秋田県仙北郡角館町に、父久兵衛、母トミの二男として生まれた。父は人形師で、祭りの山車につける歌舞伎風の人形を作っていた。角館小学校高等科を卒業後は小間物店に丁稚奉公をしたのを皮切りに職を転々し、時に月琴をかきながら町を歌い流していた多感な少年であった。十六歳の時仙北アキノと結婚。

「秋田新聞」通信員となり文学志向の情熱が高まるにつれ「新声」に投稿をはじめた。「よしあし草」にも詩や小説を発表したが、三十三年一月、単身上京して秋声社に入社。繁忙な編集業務の傍ら自身の創作に打ち込み、三十四年七月『片男波』を刊行するなど創作活動が軌道にのり出した。三十六年、新声社倒産を機に万朝報社に入社、新聞小説に手を染め出して家庭小説で人気を得る。『伯爵夫人』は大衆読書界のベストセラーとなった。また、「万朝報」や「時事新報」等に発表した作品の中から、新派劇に脚色されて新富座や本郷座で上演されたりもした。掬汀自身も「飛行船」、「国境」など喜劇や翻案脚本を発表。しかし、後年、美術方面

に興味が向くと創作への熱意はうすらぎ、美術批評家として多面的な活動を展開した。大正五年、鏑木清方、松岡映丘、平福百穂らと共に結成した「金鈴社」は日本画壇における重鎮的存在をなした。また美術雑誌『大正四年創刊』『中央美術』は関東大震災のため一時中断したが晩年まで続刊し、斯界に貢献した。昭和十八年（一九四三）八月五日、神経痛と老衰のため、東京荻窪の入院先で死去した。享年六十八。

島崎藤村は小説家、詩人。本名春樹。藤村のほか古藤庵無声、枇杷坊、藤生、無名氏等の号がある。明治五年（一八七二）二月十七日、長野県西筑摩郡神坂村字馬籠に庄屋、本陣、問屋である父正樹、母縫の四男として生まれた。明治十四年兄と共に東京に遊学、二十年、明治学院に入学、木村熊二により基督教の洗礼を受け、二十四年卒業。学資の給付者である実業家某の意に反し文学を志望してはじめ「女学雑誌」に訳文等を掲載。また、明治女学校の教師となり、「文学界」創刊に関与する。二十九年秋、仙台の東北学院教師として単身赴任、翌年辞して上京、在仙時代に書いた初めての詩集『若菜集』を刊行する。三十二年、小諸義塾の教師として信州小諸に赴任しその年結婚する。三十五年十一月、最初の小説「旧主人」を『新小説』に発表、発売禁止となる。三十八年小諸義塾を辞して上京、翌年三月、『破戒』を自費出版、自然主義文学のさきがけとなる。続いて『春』、『家』を刊行して自己を中心とする家族制度のきずなど、旧家の没落する過程を描いた。大正元年十二月、『千曲川のスケッチ』を刊行、大正二年から五年までフランスに在り、第一次欧州大戦に遭遇する。帰国後、『櫻の實の熟する時』、『新生』を完成する。昭和四年から最後の大作「夜明け前」に着手し、十